

# 創作児童文学の時代を築く

小宮山 量 平

## 1

皆さん今日は。小宮山です。上田出身の者です。私はだんだん歳をとってくるものですから、故郷でお話をする段になると、いつでもこういう川柳を思い出します。こりゃ川柳なんですよ。

ふるさとへ巡る<sup>りくぶ</sup>六部は気の弱り

編笠をかぶって、四角い何かをしょって、ちょうどあの六根清浄の御岳山巡りのような真っ白い装束を着て、金剛杖をついて、珠数を持って、あちこちのお家の前に立って何かしらん一生懸命唱えて、そしておあしを貰って歩くというのが、六部です。

この六部というものは故郷で何か悪いことをしたり、あるいは故郷に志を得られなくて、もうこんな土地へは二度と帰るまい、そう思って国を出て全国を巡り歩いているわけです。

ところが歳をとってしまいますと、この川柳どおりに言えば、そういう六部であっても歳をとるとやっぱり故郷懐しさにいつのまにか足が<sup>ふるさと</sup>故郷の方へ向くもんじゃと一。

しかし私のような年輩になりますと、もう少しこの川柳には強い意味があって、あちこちを巡ってみたけれども所詮自分が生まれた土地、あるいはその土地の皆さん、その土地のいろんな施設、こういうものが自分の心の支えになるんだなあ、ああ帰ってきてよかったと、そういうふうな思いがするということです。

と申しますのは、この大学へ来たのは初めてですけども、私のふるさとにこんなりっぱな児童教育にかかわる施設ができて、そして皆さんのような若いカタが大勢勉

強して、ここに何かこの学校の伝統が築かれてゆく。児童文化をめぐって、あるいは児童教育をめぐってりっぱな伝統ができる。とするならば、そういう伝統と、何十年か前に故郷を出た私が、いつのまにか巡り巡って結びついているという縁を感じるのです。子どもの問題が基本的に今一番大切なことなんだ、というところへ私がたどりついたことと、非常に深い結びつきをするんだろうと思うわけです。

私はそういう熱い思いをこめてきょう皆さんに語りかけようと思っております。

ついあの故郷へきてお話をし、あとから反省しますと、困ったことにはたいてい話が横道へそれて愚にもつかないことをいっぱいにしゃべっているんですね。

しかし、実はこれもあとから考えていただくと、特にこの故郷に愛着をこめてお話し申しあげたその横道の話が、もしかすると皆さんのご記憶に残って、ほかの話のほうがかえって忘れられてしまうということになるかもしれません。ア、いやむしろそうやってほしいという思いをこめて横道へそれながらお話し申しあげようと思うんです。

その横道——、ついおとといのことですが、皆さんはお気づきになったかもしれないけれども、「信濃毎日新聞」に、ある非常に大事な方の死亡通知が出ておられた。

それがどなたかと申しますと、柳兼子さんという方です。今年92歳で亡くなられた。この方は今から5年前に80何歳かでリサイクルをおひらきになったけれども、若い時とちっとも変わらないすばらしい声でした。アルトですが、日本のリートの世界をずーっとリードしてこられた人です。

皆さんはもしかすると淡谷のり子さんはご存じかもしれないけれども、そのはるか先のほうで淡谷さんたちを指導なされた方です。

上田の町でいうと、兎束先生といって、当時音楽大学を出られたすばらしい地域の指導者がおられたのですが、この兎束先生なども若い時には習ったことのある柳兼子さんという方がついおととい永眠されたのです。

で、それが私の中になんというか、もうその記事を見た瞬間に、チャートつきささってきた。

それはどうしてかっていうと、大正15年の夏のことですが、当時私が小学校の4年生。その時に日本で初めて夏の林間学校というものが開かれるわけです。ちょうどこの向こうに当時は村でしたけれども、殿代村というのがあって、その殿代村に毎年夏

になると蛙合戦といって、あの蛙が交尾のため集まってギャーギャー、やることが蛙合戦というもので、その名所になっている寺がありました。そのお寺で林間学校が開かれました。

林間学校を開くということ自体が当時の小学校の教育の中では画期的なことでした。そして約22、3人の生徒を引きつけていった柳沢ヨシノブ先生という、私の思い出の中で一番大切な小学校の先生が、そこで明け暮れに私たちに1枚のレコードの裏表を聞かせてくれました。

その片面は、“Who has seen the window 誰が風を見たでしょう”。皆さんどなたでもご存知の、ダーレガ カーゼヲミータデショって歌があるでしょう。

その歌がやがて中途を過ぎると、

カーゼワ トーリーーヌーケーテ ユクー

ってように、風が通りぬけていくときの＜トーリーー＞ということばを、子どもの息ではとてもつづかないくらい“カーゼワ トーリーーヌーケーテ ユクー”ってやると、ほんとに風というものが、人の心の中を通り、あたりの林の中を通りぬけていくような、すばらしい、さわやかな感じに私たちの胸を打ったのです。

その裏がわのレコードは何かっていうと、これこそ皆さんでもご存知の、＜トンビ＞です。“トーベ トーベ トーンビー ソーラ ターカークー”。ねえ、この歌をねえ、柳兼子さんがどういうふうに歌っているかっていうと、たとえば終りの方で、ピーーヒョロー ピーーヒョロー **ピーー ヒョロー** って、こう、トンビが大きく輪をえがいて回っているように、サーッと向こうから回って、**大きく**なり、小さくなり、**大きく**なり、小さくなりという、すばらしいアルトで歌われて、この＜トンビ＞も＜風＞も、当時の唱歌の中では最もすばらしいものとして子どもの中に初めてはいってきたのです。

初めてはいってきたその背後に何があったかと言うと、「白樺」の運動の歴史があったのです、文学の上では。また子どもに対する文化としては「赤い鳥」という雑誌が始まっていたわけです。そういうふうな文学上の運動に非常なシンパシーをもってかかわるところの芸術運動に、柳宗悦さんという方がいらっしゃる。この柳宗悦さんの奥さんが柳兼子さんでした。

ですから単に「赤い鳥」とか、「白樺」とかいうときに、それは活字になった文学運動ではなくて、今言ったように音楽であり、美術であり、芸術であり、それらが一つの時代の空気として私たちの身近にはいつてきて、それを暁の鳥のように早くキャッチした柳沢さんというすぐれた先生が私たちを林間学校へ連れて行って、明け暮れに歌とはこういうものだ、柳兼子さんの歌を聞かせて下さったんですね。

それは今から約60年昔のことですが、60年を経て私が人生のいよいよ晩年に達した今日、この柳兼子の死というものを迎えると、何やら本物の文化というものがあの時、自分のからだの中にチャット注射されたという思いがする。私たちは人生の中でああいうすばらしい本物を求めて生きなければいけないんだなあ、そういう活力素のようなものをからだに注射され、アッという間に60年生きてきた。あの時あの静かなお寺の中で明け暮れに聞いた＜風＞のうた＜トンビ＞の歌。そういうふうな歌が一生私たちの心に残り得たばかりじゃなく、今こうして皆さんに＜子どもの文化＞について語る、あるいは創作児童文化といったふうな運動の先頭に立って、とにかく子どものために、子どものためにと、子どもに本物をというふうなことで生きてきたその全生涯が、あの時強力な注射をされた、あるいは注射をしてくれた先生がいた、その注射の液体のようなすばらしい歌が、日本であの時生まれて、小学校教育の中まではいつてきたからだ。それはどんな学問よりも私たちのからだの中に生きつづけたものだったのだと思うわけなのです。本物の芸術というふうな感動が、60年をつらぬいて私を今日までひきずってきたと言えらると思います。

## 2

最近出版の世界でベストセラーになった黒柳徹子さんの＜窓ぎわのトットちゃん＞というのは、非常にすばらしい本です。あの落ちこぼれたはずのトットちゃんを抱きあげるようにして面倒を見てくれた学校の校長先生が、またどんなにすばらしかったか。そういう教育が日本にあったんだなあというふうなかたちで、あの本は売れてまいりましたが、実際に、そのトットちゃんの受けたような教育が、普通の学校の中にもあったんです。子どもたちを引きつけて、その先生が、一夏、林間学校でいっしょに暮らしてくれた。明け暮れにレコードを聞かせてくれた。そのレコードを聞いた子

どもは一生それに支えられて生きてきた。

ついこのあいだ60年ぶりでその当時の同級会というものを上田で開いたのですが、10人ぐらいの人が集まりました。そしてお酒がはいって宴たけなわになろうとして、宿の人が「アノー、カラオケでも用意しますか」。ところが誰言うとなく、「おい軍歌はやめようやな」。

私どもの歳になると、つい軍歌が出てきて、流行歌が出てきて、演歌が出てきてー。ただどもいちばん揃うのは何かっていうと、今のように＜風＞を歌ったり、＜トンビ＞を歌ったりなのです。そしてさらに60歳を過ぎたじいさんばあさんがいっしょに歌う歌があります。その歌は、たとえば、

アーオイネ	青いね
ナーツダネ	夏だね
ナーツダネー モーネ	夏だね もうね。
アーサノ ミルクト	朝の ミルクと
パンガネ	パンがね
ンーマイネ	うまいね。
アーサノ ヒカリガ	朝の光が
チーラチラ	ちらちら
ユーレルネー	ゆれるね。
マードニネ	窓にね
カーゼモネ	風もね
ナーツダネー モーネ	夏だね もうね。

っていう歌です。ちょうど信州を歌いあげた童謡です。で、この童謡を作曲した人が誰かっていうと草川信という先生。皆さんが知っている歌では、“ユーヤケコヤケデ

ヒガクレテー”これの作曲者です。この方が長野師範におられて、「赤い鳥」に出る歌を次々と作曲して、それが柳沢先生なんかによっていち早くとらえられて、子どもの私たちの中へ注射されてくる。そういうことによって「赤い鳥」の世代は生きて、演歌を歌おうか軍歌を歌おうかって段になると、うんそりゃちょっと止めとこうや、

ということになって、楽しい歌ならいくらでも歌えるんですね。

ちょうど皆さんの大学の児童文化研究所の「所報」第6号に中山先生が「童謡誕生への雑感」というのをお書きになっていました。これは非常にすばらしいエッセーです。当時の童謡が、どのようにして生まれたかという経過をよくお書きになっていると思う。

その中で、すばらしい童謡として挙げているんですけれども、野口雨情が作った童謡で、「四丁目の犬」というのがあります。「四丁目の犬」というのは、亡くなったサトウ・ハチローさんが、自分は童謡の中でいちばん好きだと。あの歌をうたうと、あの本郷の界隈に住んでいたころの町がそのままもう目に見えるが如く髣髴としてよみがえってくる、と言っているが、そういう歌です。

いっちょ一めの こども かけかけ かえれ

にちょ一めの こども なきなき にげた

よんちょ一めの いぬは あしながいぬだ

さんちょ一めの かどに こっちむいていたぞ

大正年代にそんな歌がいったい生まれたんだろうかと思うような、何か活力に満ちて、今の童謡よりももっと新しい、いきいきと町を写し子どもたちの動きを写しているんですね。けんかした子どもたちの逃げて行く方と追っかける方と、そしてそれを町かどに立って見つめている犬と、しかし、そういうふうな歌が出た時代はこれは決してひとつやふたつ出たんじゃない、今言った草川信がどういう歌を作ったかというと、

みた みた みたよ、みのじを みたよ。

きた きた きたよ、きのじがきたよ。

きつねと きりんと きんかんと。

いった いった いったよ、いのじが いったよ。

いぬと いじんと いかげやが。

と。そういうふうな、ナンセンスとしか言いようのない歌がいっぱい生まれているんです。

つまりその当時に、それだけナンセンスというものがたくさん生まれて学校の教室の中へいきいきとはいつてきた。しちめんどうな歌じゃなくて、私たちの中に実にこのすくすくと「赤い鳥」的な、あるいは「白樺」的なそういう文化のエッセンスというものはそんな歌ではいつてきます。そして、つい2、3日前に上田へ講演の準備のためにやってまいりながら、柳兼子さんの亡くなった新聞記事を読むと、そんなことが次々と走馬燈のように湧いてきて、なんとまあ私のからだの中にはすばらしい時代のすばらしい文化が送りこまれたんだろうと思うんです。

願わくばそういうふうなものが、もう一度掘り返され、それに負けないようなすばらしいものが皆さんによって発掘され守られて、とりわけ今言いましたように草川信のような作家については皆さんの学校で共同研究でもなさいまして、たとえば「ゆりかご」の歌とか「南の風」とか、すばらしい童謡が草川信によって送りこまれているのですから、みんなで発掘して、なるほどみなさんの身近な環境の中でそういうものが生まれて、あの時代の子どもたちをすっかりとらえていたということを確認してほしいと思いますね。それは早い時期に両親を失い、家が倒産したために小学校5年で東京へ出て行かなくてはならなかった私のような人間の中で、何か一つの使命感のように燃えつづけていることではあるのですけれど。青年期を過ぎて、そういうふうな文化の中へもう一度里帰りしてきたい思いがあるのです。

「ふるさとへ巡る六部は気の弱り」というときに、単に自分が減入って帰ってきたということじゃなくて、もしかするとそういうふうなことを若い皆さんが育ててくれる、そういうエネルギーを消えることなく保ってくれる。それを当てにしたい気持ちがあるのです。

### 3

で、同じそういうものがピシャッと私たちの中に注射された時代、私たちはどんな子どもの文化で育っていたか。その頃の信州の私たちが育てられた伝統的な文化、私たちが育てた民話とっていいか、それを一つ二つお話ししてみます。

たとえば、私たちが母親にだっこされて、こたつにあたっている。当時のこたつってのは掘りごたつであって、深々と母親は私たちを抱いて、そこに足をつっこんで、

そしてお尻をポンポコ　ポンポコたたきながら、「ねんねんよーおころりよ」と歌ってくれるんですね。その「ねんねんよ　おころりよ」という歌が、いつのまにか次のような文句に変わっている。同じメロディーで。あの一、男性特有のことばが出てくるんですけども、女性の前であえて言います。こういう文句なんです。

ソミンショーライ　ショーキチは（蘇民将来庄吉は）

俵の上で昼寝して　鼠にキンタマかじられた

私んとこの母親なんかはどっちかっていうと、まあ田舎で言うとなんか、わりあいと上流家庭で育ってきたはずですが、

ソミンショーライ　ショーキチハ

ネズミニ　キンタマ　カジラレタ

ってなことを平気で言いながらお尻をたたいてポンポコ　ポンポコ寝かしてくれた。

そうかと思うと、お風呂へ入れてくれてそしてお風呂の北側の窓を開くと、真正面にコノ太郎山が見えるわけです。するとどこの母親もなるべく長く子どもをゆっくりとお風呂の中で温めたい。そこで子どもを温めるために戦術として次のようなことをくりかえしくりかえし言って、5回くりかえしたらお風呂から出してやろうと。非常にかんたんな文句ですけどそいつをコノーお念仏となえるように言っでは「ヒトーツ」もう1回言っでは「フターツ」という。

それがまたすさまじい文句で、

「太郎山から鬼ゃケツ出して、鎌でかつ切るような尻をコイタ。太郎山

から鬼ゃケツ出して、鎌でかつ切るような尻をコイタ。」

で、私は民話というものをあっちこっちで発掘したりなんかする運動をずうっとやっているわけですが、これほど雄大で壮大なことばはない。「太郎山から鬼ゃケツ出して、鎌でかつ切るような尻をコイタ。」

しかしその文句から察するだけじゃなくて、この地域の方々だったら、いったい太郎山っていうのはどういう山か知っている。太郎山っていうのは、この地域の逆さ霧という特別な天候気象と結びついているのです。なぜ逆さ霧なのか、なぜ太郎山なのか、その逆さ霧の風景と結びついて「太郎山から鬼ゃケツ出して、鎌でかつ切るような尻をコイタ、ヒトーツ。」もう一度同じことばをくり返して「……フターツ」と。



そして五つばかりくり返して、「はい出てよろしい。」と言って一丁あがるわけです。  
で、母親かもしくは父親が、そうやって子どもを育てる。

これはどちらかというと、メロディーのついた方ですが、一方こんどは今日、民話なんていうハイカラなことばで言われているもののお話をします。皆さんも児童文化のことをおやりになっているのですから、もっともっと発掘していただきたいと思いますが、私たちのからだの中に残ってるお話。いくつかありますがそのうちから二つばかり典型的なのを申しましょう。

「国分寺の鐘と須川の池」というのがあります。これはこの山の裏側に小牧という所があるんですが、その小牧の界限、その界限に、良からぬことをたくらんだ者がおりまして、これがある日、川を渡って国分寺の鐘をぬすみ出した。その重い鐘をエンコラサー エンコラサーって持ってきて、やっと須川の山の上まで来て、やれ一服と腰をおろした瞬間に鐘がコロコロコロとこころがって、ドッポーンと須川の池の中へ落ちてしまった。やがて鐘は須川の池の主になって、どこからともなく風の吹く日は「国分寺恋しやボーーン 国分寺恋しやボーーン」といつて鳴るんじゃそうなの」というふうな話を私たちは聞いて育った。

これはね、大きくなってから考えると、どういうことかっていうと、私はこのごろこの小牧というところに、お百姓さん屋を一軒ゆずっていただいて、そこに住んでみて初めてわかったんですが、この山の山かげは半日村なんです。ふつうの平地よりも2時間早く日が隠れる。そしてネこの須川の池のふもとのところから眺めていますと、こちらが日が暮れる時分、向こうの神川村の方、国分寺のある方はまだまだ須川の方から見てお日様が野原をあったかそうに照らして、お百姓さんたちはみんないっしょうけんめい働いているんです。

それを言葉で言うならば、須川の方から見て、向こうの農村を何と言ったかという  
と、「あいつらもうこんなに日が暮れてきたのに、遅くまで働いて」

ところが向こうから言わせると何と言うかっていうと、

「まあまあ小牧の馬鹿どもお天と様がこんなに明るいうちに、どんどん仕事やめてうちへはいりこんでしまふ、何たるなまけもんであるか」

こういうふうには川をはさんでこちらのお百姓の考え、向こうのお百姓の考えがちが

う。ちょうどその気持ちを反映したかのように、向こうでいつものどかに「ボーン」と鳴る鐘が、しゃくにさわってしょうがない。夕暮時、暮六つの鐘がボーンと鳴る。いっそのこと取ってきてやろうと。ところが、須川の池にドボーンと落としてしまった。この鐘の一件にはこの半日村の生産があがらない、いつまでたっても向こうよりこっちの方が貧しい、そんなことに対する多少の怨嗟もこもっている様子で「国分寺恋しやボーン」と鳴る。そういうふうな響きが、伝わって来るわけです。

もう一つお話ししますとネー、ここを上小盆地と言う。上田の「上」をとって、小県の「小」をとって「上小盆地」。この上小盆地ってのは、今も休憩室で先生方とお話ししてきたんですが、普通信州の人は理屈っぽいと言われる。そういうふうに見える信州人の代表ってのは、大体安曇野とか八ヶ岳の下の方であって、この上小盆地ってのは、まん中に立ってご覧になるとおわかりのようにネ、峻巖な山なんて一つも無いんです。

信州人の理屈っぽさは、峻巖な山を朝に夕に仰いで育ったからと、そう言われがちなのですが、ここだけはそうじゃなくて、こうやって見ますとネー、見渡すかぎりの山、全部がてっぺんまで遊びに行き、てっぺんまでキノコ狩りに行ける里山なんです。これくらい典型的に四方を里山に囲まれた盆地ってのはそうあったもんでない。この盆地がどうしてできたか。次のように言われています。

昔はここは一面水でいっぱいだった。今でもその痕跡はありますけれども。そしてこの盆地をネズミがいっぱい支配していた。このネズミを追っばらうために智慧のある坊さんが、ここへどこやらの国から猫を連れてきて、大きな猫を放った。

そうするとネズミはいっせいにある方向に向かってワアーッと走り出し、山を食い切って向こうへ行ってしまった。その食い切られた痕跡が半過の岩穴であり、虚空蔵山であると。そしてこちらから迫る虚空蔵さんと半過の岩穴、この間のところを食い切ってそこに千曲川という川がずうっと開けて流れるようになったと。そうしてこの盆地はできたと。

ちょうど私どもが小学校4年生の時代に、郷土史というものが初めてできまして、国史を習う前に一応自分の住んでいる地域を習おうというわけで、コノ上小の郷土史という薄っぺらな教科書ができました。先生が山のてっぺんへ連れて行って、そうい

う話を聞かしてくれましたね。

まん中を流れている千曲川、その川の近いところには田があって、少し離れたところは畑になって、山のふもとにはキチーン、キチンと各部落ごとに鎮守の森があって、そのうしろにはよく木の茂ったキノコやワラビのいっぱい取れそうな山がある、これが日本の一番代表的な平和な里というもんじゃと、この里が日本のいちばんど真ん中で、コンパスの足を立てたらちょうど日本全国を中心がここにあるんじゃないと。

おまえたちはこの日本のど真ん中で、いちばん平和な環境の中で、暮らしている。日本というものの典型はこういうところじゃなかろうかと。—そう聞きましたねえ。

川がまん中を貫ぬき、たんぼがあり、畑があり、鎮守の森がある。で、この自然が尊いとかなんとかっていうことの前に、いちばん大事なことは人間が住みよい環境で、非常にあったかい心で住んでいたという、この日本の中の里の中の里という所こそ、正に私たちを育てた故郷なんです。

だからもしかすると、私が子どものこととか、平和のこととか、そういうことにより多く心を奪われるようになったそのいちばん根本も、こういう日本の中でいちばん里の中の里、そこにコンミュンてものが正に存在する環境というもの、そういうところで育ったからではなかろうか、とそういう思いが今もしてくるわけです。

ですから私は皆さんに、ここに上田女子短大というものがあって、単に幼稚園の、あるいは保育園のそういう教育課程のようなことだけを勉強するんじゃない、何か子どもというものの特別な大事さ、児童文化というものの特別な奥深さをみんなで心を合わせて一番専門的に勉強できるかもしれない、できるにちがいない、そういう里がここにあるんだ、とそう認識していただけるだろうかという思いがしているのです。

そこで今話しましたキンタマなんていうことばを使っちゃって皆さんに笑われましたけれども、そんな私を育てたコノ一泥くさい伝承的な文化、そこで育った私にとって、あのすばらしい柳兼子さん流の本格的な芸術ってものはショックだった。ちょうどそれと同じように、このおだやかな上小の盆地が、大正の末から昭和の初年にかけてものすごいショックを受けるわけです。

このショックをつぎこんだいくつかのものが重なってやってくるわけですが、今になって言えば「信州白樺」というのがあります。「白樺」という文学運動がある。そ

れの一つの拠点になって「信州白樺」というものがここでもって非常に多くの教師たちによって支えられる。そしてその「信州白樺」がはいってきた前後から、この上田の町を中心に全国でいちばん最初に「自由大学」というものが開かれます。上田は自由大学というもののメッカです。今はそのことを盛んに歴史上の一事件として発掘する運動も生まれておりますが――。

また同時に児童文化のいちばん大きな宝物としての「赤い鳥」ないしは「赤い鳥運動」というものがはいってくる。その「赤い鳥」というのはとりわけ小学校の中へはいってくる時には、「赤い鳥運動」としてはいってくる。

その一つに山本鼎さんの自由画運動というのがある。山本さんの自由画運動ってのはどういうのかっていうと、私どもを教えてくれた柳沢先生にしますとネ、たとえば石膏像というものを全然使わない。そういうことを私はけなすわけじゃないけれども、私が受けた教育の実感から言うとなんかそういうことをやらない。子どもたちの椅子を4つ集めて、そういう形の土俵を作ってその土俵で男の子2人を組み合わせて、スモウを取るかっこうをさせた。このふたりの組み合った形を一番簡単な線でサッサッサと、スケッチさせる。非常に少ない線で人間の動きというものが、生身の人間の動きというものがちゃんと描けるんだ、ということを何回もくり返す。そういうふうな教育を受けたわけです。

かと思うと、この教壇の上に椅子をよこして、そこにケサヨちゃんというわがクラスの女王がいたわけですが、その女王に赤いマントを着せて坐らせる。私たちにクレヨンで彼女を描かせる。そういうコノ自由画運動っていうものを受けました。

それから音楽に関してはさっき私がへたくそな声で歌入りでお話ししました。草川信的なものがどんどんはいってくる。で、こういうふうなぐあいにコノ「信州白樺」ははいってくる、「自由大学」がはいってくる。「赤い鳥」がはいってくる。

#### 4

「自由大学」について言えば、その時の講師の顔ぶれってのを見てみると、どんな大学でもそれだけの講師の顔ぶれは揃うまい、というだけのすばらしい講師が、東北大学から、あるいは京都大学から、東京帝国大学から集まってきて、話を聞くつも

りになった人間がいて、話をしようとする人間がきて、それにちょっとした設備さえあればそれが大学なんだという形でもって、定期的に大学が開かれました。

で、なぜそういうふうにいちばんすばらしい本物がこの地域でもって注射をすることができたか、その注射をされるほうの条件が、たとえば信州教育という形でもって私たちの中に根を張っていたわけです。

で、信州教育ってのはいろんな解釈がありますが、当時農家のご長男というものは家をどうしても継がなくちゃならなかった。で、家をどうしても継ぐことになった先生が、一生この地元で骨を埋めるつもりでやることのできた一番自分の意にかなった職業は、学校の先生。だから学校の先生ってのは、この地に骨を埋めるつもりでもって一生懸命情熱をこめて教育に当たったわけです。

その一方、それらの先生はつねに一番新しい時代の新しい思想を汲みとることのできるようなハートをそなえていた。それはどうしてかということ、ごらんのようにこの地域には大地主というものはない。新潟・越後やその他のように、猛烈に大きい地主が、ほとんど一つの町全部を支配しているといったような現象はなくて、だれもかれもが小さな畑や田を耕して物を作っていた。したがって一番わりのいい作物を作らなければならない。つまりお金にかえて一番割りのいい作物というものを追いつづけて、それがあつた時期「お蚕さん」ということになるわけです。

で、お蚕さんそのものよりも、この地域はまた有難いことに日本で一番天候気象のおだやかで、空気がいちばん乾燥している地域なわけです、この上田というところは。だからある種の専門家は、日本にハリウッドができるとすれば、菅平から上田にかけてで、ここは日本の映画産業ないしは写真産業の基地になるだろうと、言うくらいアノ一天氣のいいところですね。そういうところですから、蚕の種にはこれほど適した地もなかったのです。

皆さんが読むような雑誌で、あすこはステキ、ここはステキといったふうなところをお歩きになって、上田でいえばコノ一まだそういう雑誌が取りあげないところでアノ一いちばん西のはずれに坂下という町があつて、坂下の芳泉寺の前から裏どおりへはいってみますと、何とも言えないすばらしい白壁の家がぎっしり並んでいます。いつの時代にあんなすばらしい、全国どこへ行っても無いようなすばらしい町が形づく

れたんだろうと思うわけですが、それを作る力ってものは、東洋一と言われたコノ蚕の種をドンドン輸出するようになって、シルクロードのいちばん起点になってこの地方は栄えたという歴史の中で、白壁の古典的な家々というものはできたわけです。

さっき言った小牧にもそういう家はたくさんあります。向こう側の塩尻という所にもたくさんある。で、それはある時代この地方がどんなに好景気であったか、実力を持った地域であったかを示しています。そういう地域であるからこそ、常にこの低い山を越えて山の向こう側ではいったい何が行なわれてるんだろうということを、絶えず敏感に感じなければならなかったということです。

農家の後継ぎになる青年たちの気持というものを絶えず外に向けて、新しい時代をくみ取る、そういうふうな伝統の中から、どこにもなかった「自由大学」というものができてきたわけです。

最近「自由大学」の研究が進んでいますが、その根元のところをそういうふうに解明する力がまだまだ出てきていないようです。

で、恐らくそういうふうな課題は、皆さんが単にこの地域に学校があって、2年間なりなんなりで出ていけばいい、といったことではなくて、地域の特性の中で、伝統的な何かを学ぶ地域の文化的な特性を皆さんが学ぶことができたということをほこりに感じて勉強される必要があらうかと私は思うわけです。

## 5

ところで、そういうぐあいに私たちの心にピシャーッと注射するような新しい文化の中で、とりわけ「赤い鳥」とは何であったろうかをここで考えてみましょう。私は戦後に、創作児童文学の時代というものを先頭に立って築いていくにつけても、その前史をなすところの「赤い鳥」とは何であったろうかと、考えます。このことを一言お話ししておきたいと思うんです。

皆さんご承知のこの学校の中山先生のエッセーの中にも北原白秋の「赤い鳥小鳥」という歌が紹介されております。この「赤い鳥」という雑誌は、大正7年に創刊されるんですが、その創刊される前後に北原白秋は二つの歌をこの雑誌に寄せるわけです。そのほかにもいろんな歌を寄せましたよ。だけど「赤い鳥」に関して言えば、二つの

歌を寄せてそのうちの一つは載らなかった。一つだけが7月に創刊号が出るけれども、10月になって初めて載るわけです。この歌が今日まで「赤い鳥」と北原白秋の結びつきを示す典型的な歌、あるいは「赤い鳥」そのものを象徴する歌、そういうふうに親しまれている。

その歌が何かっていうと、

あかいとりことり なぜなぜあかい あかいみをたべた

しろいとりことり なぜなぜしろい しろいみをたべた

あおいとりことり なぜなぜあおい あおいみをたべた

で、私はこの歌を紹介する時には、全部をひらがなで書くことにしています。原文とは違うんですが、これをひらがなで書いてみると、何とも美しい、万葉ことばの伝統をちゃんとすべての子どもにもわかるように書きあげている。そして全部の音が美しい。その上、こうやって書かれてみると何ともナンセンスだ。意味はなんにも無い。

赤い鳥小鳥 なぜなぜ赤い 赤い実を食べた それで後に白秋自身が、そりゃ黒い実でもいいんだ、茶色くてもいいんだと。ただたまたま、赤い鳥、白い鳥、青い鳥、というふうを選んだ、と言っとりますが、それもそうでしょう。

が、しかし後にいたって私どもの心にしだいにこのことばが焼きつけられてきて、どうしても「赤い鳥小鳥」でなければいけないし、「白い鳥小鳥」でなければいけないし、「青い鳥小鳥」でなければいけないという、そういう思いがだんだん累積されてくるのです。

皆さん自身の頭の中に、赤・白・青と、おいた場合に、フランスの旗が思い浮かぶでしょう。自由と友愛と平和と、いわば近代というものの一番基本のモラル。自由と友愛と平和と。後に日本では友愛ということばを「博愛」といった妙テケレンなことばにしてみましたけれども、実際はフラタニキー、＝「友愛」と訳すのが一番いいだろうと思います。

自由と友愛と平和と、近代を築く上で一番基本的なもの、それが「赤い鳥」のスタートの時期に白秋によって、というか、その時代の児童文化の問題として、きちんと措かれたということが重要です。

さらにもう一つの歌、これも私は非常に大事な歌だと思うんですが、この歌を寺田

透さんという、もと東大の教授であった文芸評論家が発掘しているのですが、同じ時期に白秋はこういう詩を寄せているということです。

かあちゃん かあちゃん どこ 行った

あーかい 金魚と 遊びましょう

かあちゃん 帰らぬ 寂しいな

金魚をいっぴき しめころす

まだまだ帰らぬ くやしいな

金魚をにひき しめころす

なぜなぜ帰らぬ ひもじいな

金魚をさんびき しめころす

涙はこぼれる日はくれる

あーかい金魚も しーぬしぬ

かあちゃん こわいよ どこ行った

ぴかぴか金魚の 目が光る

言わば非常にこわい歌です。なぜこのこわい歌が創刊時の「赤い鳥」に寄せられたか。

つまりそういうふうなこわさ、それは言わば近代文学の持ってるリアリティーといえますか、近代文学が容赦なく、たとえば留守番を命じられた子どもの中に、今日というカギッ子たちの中に、どういうふうな心の葛藤を生むであろうかと、関心を抱くことになるのです。そういう子どもの心の葛藤を實に見事にうたいあげている。

ですから、「赤い鳥」の初期の時代に、その他たくさんの作品の例がありますが、白秋と「赤い鳥」との関係で言えば、近代思想の根本がそこに掲げられ、近代文学のいちばん大事な要素が、大きな期待で「赤い鳥」に寄せられていたのだと言えるでしょう。言わば「赤い鳥」は近代思想と近代文学の、大きな申し子として生まれたのです。そしてその創刊の宣言にあるように、泉鏡花、島崎藤村、志賀直哉と、当時のいわば一流の作家が、すべて子どものためには協力しましょうということで始まっています。有島武郎もいたし芥川龍之介もいた。こういうふうな人たちが全部協力を惜しまず「赤い鳥」を支援したわけです。



ところがこの「赤い鳥」が飛び去って、今からふり返ってみると、「赤い鳥」の運動は、今言ったように、近代思想と近代文化というものを上から注入しています。つまり偉い人たちが子どものためにと行って送りこんだ結果が、一つの特色として現われています。これはいい特色とも言えるし非常に限界を持った特色とも言えるのです。

たとえば、「赤い鳥」は自然のことばかり歌っている。「赤い鳥」の童謡というものは、皆さんがご承知のどれを取りあげてみても、自然を歌うと同時に、何か別れの歌、何かがどこかへ行ってしまった歌、何かがどこかへ消えちゃった歌、そういうかたちで観照的な歌が多い。つまりつっぱねてそれを見る、写真で言えば、クローズアップをするんじゃなくて、なるべく遠くひきしぼってその全体を前もうしろもわかるように、それがどういう環境の中に置かれているか、そんな目で見ている。

戦後出てくる「キリン」というこのあとつぎの雑誌の子どもたちの詩とくらべてみると非常に特色があるけれど、そこには行動的なものはなんにも出てこない。コンテンプラティーフなものばかりが出てくる。

ところが、そうして私たちの中へ注射してくれた「赤い鳥」は、後に第3の特色を表わします。それは昭和4年から6年にかけての中断期を経てからです。

昭和3年に3.15という大きな弾圧事件があって、昭和4年には4.16という形で特高警察による日本の思想運動に対する大きな弾圧があって、ほとんどあらゆる文化運動が息の根をとめられる時代がありました。

そんな足かけ2年の空白を経て、「赤い鳥」はもう一度復活してきます。その「赤い鳥」の中には、ポスト「赤い鳥」という形で、あるいは後期「赤い鳥」という形で、「赤い鳥」が今までのようであっていいかどうかという、やや反省が、やや批判がこめられ、事実としてその中から批判的な勢力が生まれてきたのです。

で、その一つに、つまりこの中断期を経て、かつて「赤い鳥」の中で育った人たちが、逆に編集に参加するようになる。この中で代表的な人がたとえば与田準一さん、たとえば藤田圭雄さん。こういう人たちが今度は「赤い鳥」の申し子として逆に「赤い鳥」のリーダーになっていきます。

で、こういう人たちが、たとえば子どもの綴り方というものを非常に重視するようになる。「赤い鳥」の投稿の中では、これまでは詩が多かったけれども、綴り方がどんどん投稿されるようになる。

その中からある学校の大木先生という人が指導した豊田正子という少女の綴り方が、のちに「綴り方教室」という本になってものすごい勢いでベストセラーになるんです。

しかし発刊当時の雑誌には、そういう投稿がいっぱい載る。で、子どもたちの発表の場が出来てくると、やがてその子どもたちの素晴らしさというものが刺戟になってあらゆるところに生活綴り方運動というものが出てくる。子どもたちが事実を見ぬく素晴らしいエネルギーを持ってるんだと、そこに注目して、あらゆる学校の中に生活綴り方運動というものが生じてきます。そういうことに、一番強く影響を受けたのは、やっぱり長野県であって、たとえば諏訪の地区、上田の地区にはたくさん生活綴り方運動の影響を受けた先生方が現われるわけです。

その影響の現われ方をつぶさに、当時の歴史をほうふつと、目に見えるように書いてくれたのが、早船ちよさんの「湖」という作品をふくんだ3部作です。

早船ちよさんの一連の作品の中に、その当時の状態が描き出されている。

一方信州が生んだ素晴らしい児童文学者に塚原健二郎という方がいます。この塚原健二郎さんの影響を受けて、やがて「峠の旗」といった雑誌が信州で生まれ、その中からたくさんの現代の児童文学者が生まれるという、ずうっとコノ歴史的なつながりってものがみんなあるのです。

その中でさし当ってはもっと生活的にというふうには、標題が掲げられましたけれど、そのことをコンテンプレーション（観照的）と比べて言うと、もっとビヘーヴィア、行動的に。単に観照的ではなくて、動的に人間は観察しなければならない、描き出さなければならないという考えが出てくる。恐らく近代の芸術にとって、このコンテンプレーションだけではなくて、それと、行動的なというこの両者が一体になって新しい文化というものが生まれるんだ、新しい児童教育ってものも生まれるんじゃないかなろうか、こういうふうな可能性がやっと見えた時昭和11年に、「赤い鳥」の指導者である鈴木三重吉が亡くなります。

この鈴木三重吉が亡くなったその年にもう一つの赤い鳥の歌が白秋によって寄せられています。昭和11年10月号に載って、それが「赤い鳥」の最後の号になる。その歌がどういう歌かというと、

赤い鳥小鳥 　いつまで鳴くぞ　えんじゅの枝に

陽はまだ赤い

赤い鳥小鳥　なぜ風寒い　光がかげる

あの空遠い

赤い鳥小鳥　何見て出てる　お馬で駈けた

おじさま見てる

赤い鳥小鳥　どこへ行ったお馬　月夜の雪に

とととと消えた

お馬<sup>ンマ</sup>で駈けたおじ様見てるっていうのは、鈴木三重吉は非常に乗馬が好きで、子どもたちの乗馬クラブまで作ったようなおじさんだったわけで、このおじさんが消えていってしまったというこの歌が象徴的ですが、この10月号をもって「赤い鳥」は廃刊になります。

## 7

以来10数年にわたって児童文化というものは、目立った雑誌は持たなくなって、世の中は軍国主義を鼓吹することにやや大きく傾きすぎたような「少年倶楽部」やそんなものだけが支配してしまって、「赤い鳥」のような雑誌は遂に私たちの目の前から消えてしまいます。

ですから2.26事件というものがあって、昭和11年度を境に日本の歴史が大きく戦争の側に傾き、15年戦争のまっただ中へつきこんでいって、昭和20年に至る約10年間、それはまさに日本文化にとって暗い谷間であったと言われます。

ところが「赤い鳥」が消えてしまったあと、はたして日本の文化は暗黒時代だけを迎えたんだろうか、どうだろうか。

その話は少しむずかしい話になりますけれども、皆さんの中で心ある人たちが私の申しあげるこの昭和10年代というものは果して暗黒の時代であったか、なかったか、

そのことにこれからの勉強のテーマをさし向けるとすると、いろいろなことがわかってくるはずです。

ともすると日本では、あの戦争ですべてゼロになってしまい、そして負けたことによってやっと光がさして、アメリカさんのお陰で日本はまた生産に励んで、今日の日本を迎えたんじゃないか、めでたしめでたしといったふうな形のロマンが日本の戦争史を色どるようになっていきます。

であるからこそアメリカがくしゃみをするとう日本が風邪をひくというふうな形の日米関係ってものが、一番いい、すばらしい関係として今日までつづいてきている。ソビエトのボイコットでオリンピックの選手が減った分だけ日本がふやしてあげようじゃないか、といったふうなハネムーンが日本とアメリカの間をずうっと色どってくる。

それがいいことか悪いことかを言ってるんじゃない。そういうふうな単純なロマンで、日本が戦後の歴史を営んでいるという事実を申しあげてるわけです。

で、その事実をもう一つ醒めた目で、あるいはもう一つ痛切な思いで見抜くためには、私たちは昭和10年代というものをもう一度見返らなくちゃならない。

つまりどういう意味かと言うと、さっき「赤い鳥」の大きな財産として一つは観照的だという、近代日本の中で一番すばらしい精神要素というものを、あげたわけです。この観照的なということが、それまで無かったわけですからその意味では非常にすばらしい。それともう一つはその観照的な「赤い鳥」に対してもう一つビヘーヴィアな行動的な人間の問題を考えなくちゃならない。これを本当に総合的に考える前夜に、「赤い鳥」は鈴木三重吉を失い、そして挫折してしまい、児童文化というものは消えてしまったわけですが、しかし「赤い鳥」文化で育った私たち、昭和10年代に初めて青春を迎えた私たちはちゃんと育っている。

それは日本が軍国主義化していくその流れに呑みこまれながらではあっても、しかしその中で私たちは人間の問題として何を進めるべきか、何を失ってはならないか、そういうふうなことを見失わないだけの何かを持っていたのです。そこに昭和10年代に青春を迎えた世代の何かコノ日本の文化に対する発言があるわけです。

で私などもその末端に並んで、決してあの昭和10年代の暗い時代はまっ暗であっただけじゃなくて、その中で後の大きな精神的な財産というものを、こつこつと貯金す

ることができたんだと言いたいわけです。

その貯金の2つ3つを、例にあげますと、たとえば私が昭和8年には16歳でしたか、なったわけですが、それから昭和11、2年の間に次のような作品が日本で生まれてくる。代表的な典型的なものをあげますと、第一に非常に私たちに影響を与えたのは、そして皆さんもぜひお読みになったらいいと思うのは、島木健作という作家です。

この島木健作は、「癩」という作品を書き、「獄」という作品を書き、やがて「生活の探求」という作品を書きます。この「生活の探求」は、日本のいわゆる代表的な転向文学であって、進歩的な人たちから見れば、島木健作は転向文学やと、つまり圧力に押されて日本の青年が我を折ってしまったんだと、そう決めつけられたわけです。その決めつけられた文学の中から、たとえて言えば佐久病院の院長さんに若月俊一さんの方がいらっしゃる。この若月俊一さんは青年の時代に島木健作の「生活の探求」を読む。若月さんが、その作品から影響を受けたのは、単に思想や文化の問題をかけ声で言っていては駄目なんだということでした。本当にお百姓の中へはいってお百姓さんといっしょに考え、お百姓さんたちに奉仕するそういうふうな地味な立場こそがこれまで日本には無かったんで、それを自分は貫ぬきたいと、そう考えて当時東大を出てそしてゆくゆくは輝かしいお医者になるはずのスタートをかえりみもせず、信州の田口村に近い農村で一生懸命医者のおやりになるわけです。

それが戦後になってしだいしだいに芽をふいて、そこに世界の農村医学の拠点というものができた。今世界で農村医学というものを、特に公害の激しい時代に日本の農民のみならず、世界のお百姓さんたちが本当に公害的な作物を作らないで、本当に素晴らしい農業というものを維持するために、またその中で健康を維持するためにどのような行き方をしたらいいか、そういうことを世界の学者が集まって討議するとすれば、それは決して東京に集まるんじゃない、ニューヨークに集まるんでもない、パリに集まるんでもない、日本の田口村（現佐久市）に集まるわけです。

つまりあの暗いと言われた時代、昭和10年代、その時代の中にしかし人間は考えることをやめないという、そういう島木健作の文学の力、それに動かされてそして農村へ足をふみ込んだ一人の青年の夢が、やっぱり40年、50年かけてみるとちゃんと夢は結ぶという実績を私たちに典型的に示してくれている。

その意味で佐久病院ってのは単に病気になったらご厄介になりますという拠点ではなくて、文化の問題として私たちにとって拠点であり、皆さんはその非常に身近な所にいらっしゃる。

第二に同じ時にスタートした作家に石坂洋次郎という方がいらっしゃる。この方はその題名も見事に「若い人」という作品を書いた。これが「三田文学」という雑誌に載る。その主人公は江波恵子さんという。

あの時代の中で江波恵子というすばらしい女性を典型化したこと自体がすばらしいことですけれども、それを当時青野季吉とか勝本清一郎とか、批評家たちが、ほめあげたわけです。私どももあわててこれを読んだ。

と、これはなんてことはない、複雑なことは何もないんです。何でもありません。ただ江波恵子は、あれかこれかと、人間が決めつけるような傾向に対して、あれでもないこれでもないと言っている。人間は相対的に考えなくてはいけないし、現実的にものを考えなくちゃいけないし、そうでないと喜劇的な存在になるということを、自分の先生である間崎先生や橋本先生や、こういうような人たちが当時のイデオロギーにかぶれて、なんかコー宙に浮いたような論争をやっていると、そのそばにいて水をかけるような白けたことを言うわけです。

この白けたことを言うことによって江波恵子は、人間はもう少しさめた心が必要だ、しかも青春というものは不屈であり楽しく考えなくちゃいけないんじゃないか、と言っている。

それに似た本が最近出た。浅田彰さんの「構造と力」という本です。やたらに売れるという妙な現象が生じていますが、私どものような古狸になりますと、ああ、あれは江波恵子の再来やなということでもってよくわかるわけです。

人間はもっと相対的に考えなくちゃならないし、事実在即して考えなくちゃならない。でそれが本当に戦争中の暗い時代の中で、生新たな不屈に生きていくことのできる一つの基本的なモラルになったのです。

それなるがゆえに、戦後最初に現れたすばらしい映画が「青い山脈」になるわけです。そして「青い山脈」の主題歌であるあの皆さんが知っている歌は、日本の近代50年の中で一番若者たちをとらえる歌として一つあげるとすればあの歌がまず第一にあ

がってくるというくらいすばらしい歌になっています。

そういうぐあいでこの江波恵子という人物に寄せて私たちは「青春は不屈である」という、青春は決して固まったイデオロギーやなんかでもってどうこうするんじゃないくて、そいつを手玉にとってちゃんと生きぬけるんだと、そういうことを江波恵子は象徴しているのです。

この島木健作についても、石坂洋次郎についても、今はその気になれば文庫本もたくさんあるし、全集もありますし、今私が紹介したことで皆さんが読みたくなったとしたらこれらを読むことができる。

しかしもうひとり、この時代にもっともすぐれて青春的な意味を持った作家をあげるとすれば、それが椋鳩十という、信州出身の作家です。

椋鳩十、今では動物文学の作家である、児童文学の代表的な作家である。そういう意味で皆さんはその幾つかの作品を知っているし、非常に多くの作品が教科書なんかに取りあげられて親しまれています。

しかし私のように昭和10年代を生きてきた人間にとっては、それだけではありません。椋鳩十が今から何年か前に、ポプラ社という子どもの本の出版社で、全26巻の全集を完成したその瞬間に、私は先生にもその出版社にも申し入れて、「これで子どもの文学としての椋鳩十は終りなんですね」と、言ったことがあります。「では、私は本当の青春の文学を描いた椋鳩十というものを、私の手で出ささせていただきます」と、言いました。

そのころ椋鳩十が私たちをとらえた作品は、「山窩調」と言った非常にむずかしい題名の作品なんです。これはたった500部作られた椋鳩十の自費出版で出て、あちこちの作家やなんかに送られて、それから3か月の後には当時の毎日新聞と「朝日新聞」の両方が彼を追っかけて、忽ちかれは両方の新聞の夕刊の連載新聞の作家になるというふうに時代をとらえたわけでした。なぜそんなに受けたのか、なぜそんなに時代をとらえたのか？

サンカチャーのチャー  
この山窩調の調の字に現れているように、そのころスペインの小説でピオ・バローネという作家がごく一部の人に愛読されていました。それに影響されて、椋さんはこ  
サンカチャー  
の山窩調というものを書いた。

それは何かっていうと、当時の世界の思想問題ってものは、スペインをめぐる渦巻いていた。つまり世界の良心と、ファシズムとそれがスペインを舞台にして戦っておった。

史上にヒトラーが出てくる、ムッソリーニが出てくる。それらに押されて、スペインのなかからはフランコ将軍が出てきて、世界の良心が、言うなればスペインで敗北を喫するわけです。世界は滔々としてファシズムの方向へ傾いていくわけです。そういう時代の大きな趨勢の中で、決してそういう時代に負けなかったバスクの民がいる。それはフランスとスペインの国境に沿ったピレネー山脈、その一番北のところに今でも、いや今度は民主化されたといわれるスペインの中で、独立運動を唱えているバスク族というものがいます。このバスクの民の中から「バスク族牧歌調」という作品が生まれて、そこに不屈の民が描かれている。

それから影響を受けて「山窩調」は書かれました。作品は、日本に実在するかしないか、クエッションマークはつくが、山奥に住んでいる山窩という一族に題材をとって、若者たちよ、へなへなとその膝を折るな、と言っている。すばらしい自然があるじゃないか、山があるじゃないか、川があるじゃないか。そういう中にはいりこんで人間は、根源的な自由というものを失わないで暮すことができるんだ、と。根源的な自由というものが人間の本当の自由なんだと、そのことを訴えかけるような作品に、私たちはハーツと打たれた。

で、今の時代ほどその根源的な自由というものが、私たちにとって大きなはげましになる時代はないわけです。

そこで私は、椋鳩十の大人向けの25巻の全集というものを作って、椋鳩十の中にひそんでいる大きな楽天主義、根源的な自由というものに生きる人間の生きざま、そういうものをふくめた作品集を、アー去年完成したわけです。それが文部大臣選賞というものを受けて、はなはだ名誉なことになるんですが、そんな名誉なこととはともあれ、非常に多くの青年たちに読まれるようになった。

で、話を元に戻して言うと、昭和10年代というものは、そういう形で決してソノ日本の精神が膝を折っただけじゃなくて、日本の精神はそうやって生きてきた。若月俊一さんのような人たち、椋鳩十のような作家、石坂洋次郎のような作品に生きている。青



春への大きなはげましとして、私たちを励ましつづけてきたのだと言いたいのです。

そういうことによって、あの戦争中にもだまって目をつむっていただけじゃなくて、日本の行く方を地についた形で心配するという一群の日本の昭和10年代世代というものが育ったわけです。

年のころと言え、今50代の後半から60代の前半でしょうか。そんな年齢の中に、決して利害得失でものを考えるんでもない、しかし真実というものを守りぬくことの値打を、十分に知った一世代が存在するということです。私について言えば、子どものために何をしなければならないのか、ということのために、できるだけのことをやろうと、思っています。

話が長くなりましたが、もうじき端しょって終わります。

## 8

けれどもそんな私たちの中に、敗戦直後に育った思いは何であるかという、ああいう形で日本が負けて、ああいう形で戦後の処理が行われて、これでいいんだなと思ってると、やがて20年先、30年先に私たちは本当にもう一度負けることになりますゾ!!という思いだった。

その例をただことばだけで並べてみると、皆さんがお若いからわかりにくいかも知れないが、一つには戦後、農地改革というものが行われたわけです。で、これは今まで結構だなということだけで評価されてる。この近辺もみんな農地改革でうるおったわけです。その時期に日本のお百姓たちが農民というふうにスマートに自分たちの呼び名を変えて、しかしやがてすべての農民たちが小さな小商品生産者、商品生産者になっていく。お百姓、土地を作るお百姓になるんじゃなくて小商品、いつでも割のいいものを追っかけて作る、という生産者になっていく。そういうことのいきつくところはどこなのでしょう？

お百姓が農業をやめてしまって、土を利用して農薬を使って、そこからたくさん収益だけあがるような、そんな商品生産者になって、その行きつく先は日本にとってどうであろうかと。そのことを一番アノ心配したのは、この昭和10年代の世代です。

そしてまた、日本ではインフレというものがずうっと続くわけです。これは日本の

占領政策の中で、ロストフという、マサチューセッツ工科大学教授で、時の大統領の顧問になる学者が、日本に慢性的なインフレーションをおくことは、日本人がずうっといつまでもお金持になってるような気持ちにさせることであって、占領政策を成功する上では必要なことだと言っている。で、そのとおり日本の戦後史は進んだ。

やがてそういうふうに進んで行きつく先は、日本人の大部分がお金を元にしてすべての人が、おれは中産階級になったぞと、思い込むことになって現われた。自分たちの生活を顧みて、豊かになったような錯覚におちいる、あるいは豊かになったと思ひこむ。まことにそういう意味では日本は豊かな国になって、日本の95%までの人間が極端に言えば小金持意識になった。つまり小商品生産者に農民かなり、大部分の日本人が小金持意識になって、そして3番めに日本の民主的改革というものが、やがてはこれがすべて圧力団体化する。この圧力団体化するというのは、アメリカが1930年代の入口でニューディールというものをやって、自分たちで一番深刻に学んだ方向です。

つまり、あらゆる農民団体や労働組合を全部、圧力団体にしてしまう。なるほどお前さんたちの言うのはもっともだ。だから一緒になって解決しようじゃないか、と。体制の相談役にして一緒に綱引きをする人間にしてしまう。

こうなってくると、事はお金の上での分け合いだけの問題になってくる。たとえば、さしさわりがあるかもしれないけれども、日本の一番大きな組合の一つである教員なら教員の団体っていったふうなものも、ある改革案を示すと、政府の方が率先してその物質的な要求は全部吞んでしまう。つまり、70万なら70万の人間が政府によって総買収されてしまう。お金のことが解決すれば、問題は解決されたような気になってしまう。

そういう形でもって農民がお米の値段をあげろと言ってくる。消費者があげるなど言う。その中を取って日本で一番大きなお金が米の補償に流れていくというふうなことが、どんどん どんどん進んでくるわけです。

そういう参加型のデモクラシーってものが、やってくる。そうして根元的なものがどこかへ消えてしまう。根元的な、つまりお百姓さんが単に作物を作るだけじゃなくて土を作る。豊かな実りが生ずるように土を本当に農薬なんか加えないで作っていく。

あるいは労働者は、単に時間と賃金のことじゃなくて、やっぱりすばらしい生産と、それから労働の喜びというものを維持する心を貫ぬく。そしてまた私たちが自由という時、人間の根元的な自由、それを大事にする心というもの、それらが、どうやらこの日本では挫折しそうだ、という時に私たちは第2の敗戦を迎えるだろうと、私は思います。

その第2の敗戦を迎えないためには、私たちが子どもたちに、別の文化を、あるいは私たちの反省に満ちた、子どもたちへのはげましを、送らなくちゃならないだろうと思うのです。

そういうことを私に一番よく教えてくれたひとつの小説があります。それは小学校時代に、小学生全集の中で読み、やがて大学へ行ってから横文字の教科書の中で読み、そして戦後岩波文庫の中にあるのでくり返しくり返し読んだ、アルホンス・ドーデーという人の、「月曜物語」です。

この「月曜物語」の一番最初に、皆さんがたぶん教科書の中で一度ぐらひはふれたことのある「最後の授業」という作品があります。

この「最後の授業」というのはどういうのかっていうと、あのドイツとフランス、昔流に言えばアルザスローレンというところで、プロシャとトロイセンとフランスが国境を接している。そこできのうまで本来はフランス語を使っているフランス側の住民であったものが、あしたからはドイツの支配下にはいる、そのためにフランス語を使ってはならないという規制を受けるわけです。

あしたからいよいよその村は、フランス語は使えなくなるという日に、日ごろ生徒たちからもあんまり人気のないアメルという名の先生が、村人といっしょにちょうどこの会場のようなぐあいに村人がうしろの方にいる、生徒が前の方にいる、そういう形で教室に集まってもらって、一つのお話をするわけです。

「あしたからフランス語を使っちゃいけないことになる。しかし、フランス語というものは、非常にすぐれた国語なんだ。だからもしもあなたがたが、心のどこかにその大事なフランス語、自分たちの愛する国語というものを、ちゃんと胸の奥においとくならば、皆さんは自分でいつでもあけることのできる牢屋の鍵を持って牢屋へはいるようなもんだ。どうか胸の中にその大事な自分たちの

ことばというものを失わないように。」

そういう話をしてから黒板に向かって、

“ビーブラ フランス（フランスばんざい）”

と大きく書いて、そうしてもう自分は生徒たちの方をふり向くことができなくて、黒板に向かってじっとたたずんだまま、うしろ手で、“もう解散しなさい、出ていきなさい”と相図をする。——それでその作品は終わっているのです。

## 9

私たち昭和10年世代というものは、恐らく日本がそういうコノ一人々が小商品製産者になりきり、小金持意識になりきり、そして根元的な自由というものを追求する力を失ってゆくことについて、もはや子どもの問題として考える以外にはないわけです。今では老人ですから。たとえば原爆の問題についても何についても言いなりになる国民というものは、その意味では、形の上では一番豊かになりながら、高度な資本主義国が、高度な資本主義国によって占領されるという見事な占領政策の成功を実現した典型的な国になっていく。その中で本当に人間の魂というものをどう守りぬくか、ということについては私たちはもう子どもの問題として考える以外にない。

その戦後の水を飲んだ、戦後の繁栄、とりわけ高度成長なんていう水を一ぺん飲んでしまった、お酒を一ぺん飲んでしまった大人たちは、もしかするともう挫折する以外にないかもしれない。錯覚のまま生きていく以外はないかもしれない。しかし、そういう自分たちの歴史というものを見直すことのできる世代というものを、どういうふうに私たちが育てたらいいのか？ そこに児童文学の根本問題があるんじゃないかなろうかと。そのことを私が直接に身近に知ったのは、まだ1950年代の半ばでした。私は2つの本を訳して出しました。

一つは『死のゲーム』という本です。アルバート・カーンというアメリカの人が、あの朝鮮戦争を仕掛けた、やがてベトナム戦争を仕掛けるアメリカというものが、どれだけ子どもたちを駄目にしてしまうか、そういうことを具体的に証明した。その書物が『死のゲーム』というものです。

そしてもう一つ、ハワード・ファストというすばらしい作家がいました。このハワ

ード・ファストという人は、もしかすると皆さんのような年齢の人はもう忘れているかもしれないけれども、「ベン・ハー」というすばらしく大きなドラマの脚色者であり、その前に「スパルタカス」という戦後最大の大きな映画の原作者でもあります。

そのハワード・ファストという人が、「サイラス・テインバーマン」という作品をお書きになった。これを私は『平凡な教師』というふうに訳してみた。

この「平凡な教師」という作品はどういうのかというと、ある日ある時、原爆の反対署名をした。その平凡な先生が、ただそれだけの理由で、やがてお前はアカだというふうにまわりから言われる。「アカでない、アカでない」と言えば言うほど「アカだ、アカだ」と言われて、しまいには法廷で侮辱罪にまで問われて、牢屋に入れられるという物語です。

この救われない平凡な教師をめぐるって実に熱心にこの教師の救援運動をする人たちがいる。その一つの大きな勢力はクエーカー教徒です。アメリカが、そのようにして人間を滅してはならないということを、クエーカー教徒たちは熱心に主張するわけです。

そしてそのクエーカー教徒たちと手を組んで、もう一つもっと広くそのことを叫びつづけた人たちがいる。それはだれかかというと、アメリカにとって一番の作家であるマーク・トウエーンの研究家たち、マーク・トウエーンの読者たちが、全部手をにぎってこの教師を救おうとするのです。

で、私は日本のあすに同じ危険を予想した時に、一体私たちは、一人のマーク・トウエーンを持ちうるだろうか、一人のマーク・トウエーンが私たちの中から出てくるだろうか、日本の文学にはそういうエネルギーがあるだろうか、と考えてしまう。そう思った時に、これはやっぱり日本の中に、日本の子どもたち自身のために書かれた文学があって、それを読んだ子どもたちが育って、そういう中からすばらしい作家が育ってくるという、そういうことがなければならぬと、考えました。マーク・トウエーン的なものを文学の根元と考えて、出版に情熱を燃やしました。さっき私を紹介したお言葉の中にあったように、いろんな出版をしていたわけですが、それらに対する情熱より何より、一番の情熱を子どものための文学ということを作ることに熱中したわけです。

そして熱中しはじめるとすぐ私の目の前に、今言ったマーク・トウエーンと同時にもう一人の教師が現われる。全く同じ年代に生まれて全く同じ年に昭和10年じゃない1910年に亡くなった人類の偉大な教師レフ・トルストイ、『戦争と平和』の、『アンナ・カレーニナ』の、『復活』の、あのトルストイ。このトルストイが、やはり当時の追いつけ、追い越せ、という形で、ヨーロッパの先進国を追いかけ始めたロシアの行く手に立ちふさがって、それでは子どもは育たない、本当のロシアの子どもたちの魂のためには何が必要か、そういうことで皆さんがご存じの「人は何によって生きるか」とか、「人はどれほどの土地を必要とするか」とか、総じてトルストイの民話と言われる多くのものを書き、自分自身がヤースヤノ・ハリヤーナという自分の郷里へひっこんで、農民の子どもたちの教育を始めて、そこで未就学児童から、日本流に言えば6年生の子どもまでの彼の手になる典型的な教科書を作るわけです。

私は、その教科書を「子どものための本」という意味で特別抜き出して、本づくりをしながら、なるほど、今の日本に、これからの日本に必要となるのはやっぱりトウエーンのような作家であり、トルストイのあのような努力だなど、そう思いながら、児童文学へと出発したのです。

勿論そんな児童文学への熱い思いが、最初から理屈できれいにわかってたわけじゃない。最初に掲げたスローガンは二つしかありません。やがて日本の子どもたちには、文部省がなんだかんだ言うとか、道徳教育だなんだかんだと、いろんな圧力が加わってくるだろうけれど、さいわいなことに子どもたちってものは、全部忘れるという能力を持っている。自分の経験に照らしてみても教えられたことはきれいに忘れてゆく。

しかし自分が進んで読んだ書物の楽しさ、それからいい先生に習うことができたかどうか、この二つだけは子どもたちの心に生きつつける。それならば忘れることのできない多くの物語を日本の子どもたちのまわりにいっぱいおいてやろうではないか。

そういうことのために、外国の翻訳もの、あるいは過去の名作もの、こういうものが学校図書館の中を全部しめていた時代の中に、へたでもいい、何でもとにかく日本の作家が日本の子どもたちに、ということで、創作児童文学という仕事を始めたわけです。

最後に、それらの中から私のベストテンをあげるとすれば、一番最初に私が生み出したのは『綴方兄弟』という、これは日本の子ども自身の作品をまとめた本です。

大阪に野上タンジ、野上ヨーコ、フサオという3人の子どもがいて、なぜこの本が一番最初に私が大事にしたかという、この中に、一番末っ子のフーチャンというのがいるんです。で、これは戦後の日本が生み出したおそらく一番すばらしい人間像だと私は思います。そのフーチャンは、たとえばこんな詩を作っている。「おしょうがつ」という詩です。

おしょうがつには  
むこうのお店の前へ  
キャラメルのはらはこをひろいにゆく  
コーリの町へ  
映画のかんばん見にゆく  
たこもないけど  
たこはいらん  
こまもないけど  
こまはいらん  
ようかんもないけど  
ようかんはいらん  
大きなうさぎがかかるし  
キャラメルのかじびきが当るし  
くらまてんぐの絵が書けるようになるし  
てんらん会に1等とれるし  
ぼくうれしいことばっかしや  
ほんまによいしょうがつがきよる  
ぼくは来年がすきや

こういう詩の中に、子どもの持っているあらゆる楽天性がある。たこもないけど  
たこはいらん こまもないけど こまはいらん。決して物質が子どもたちを豊かにす

るんでない。そういうものをすべて拒否しても、子どもの中にある自主的な力というものはずばらしい。その自主的な力は、たとえば別の作文の「ぼくのうちの前」という作文の一番最後のところに、こんな文句がありますが、強く感じられます。

フーチャン毎日うちの前をそうじするんだ。このそうじしながら、バスに乗っている人は、みんなその窓から ぼくのうちを見ている。そして「ああきれいだこと」「ああ気持がよいこと」と言っているみたいです。もしぼくらが おにいちゃんみたいななまけものだったら、きっと「ああきたないこと」「ああ気持が悪いこと」といわれることでしょう。ぼくはそんなこといわれるのが一番いやなんです。

で、今日道德教育だの子どもものしつけだのと、よく言われますけど、兄弟が非常に多かった子、一番末っ子のフーチャンは、やがて亡くなります。私は病床に立ちあつてついに亡くなる姿を見ているものですから、フーチャンの話が出ると胸がいつもせまるんですけども、そのフーチャンのこんなに単純なことばっていうものは、私をつき動かします。この子のために、あるいはこういう子どもが私たちのあとをつぐために、がんばらないかんなど。

物がありすぎてヘナチョコになってゆく子どもじゃなくて、何も無いけど、がんばる子どもたち、そういう出発を約束したのが「綴方兄弟」でした。

そんな子どもたちのことに触発されて、私が「麒麟」という雑誌を受け継ぐのです。大阪で作家の井上靖さんが新聞記者であった時代、竹中郁さん、足立巻一さん、それから亡くなった坂本遼さん、こういうふうな四人の方が、子どもたちに「赤い鳥」のような夢を、ということで、「麒麟」という雑誌を出したわけですが、その「麒麟」という雑誌を私は受け継ごう、ひいては、「赤い鳥」の仕事を受け継ごうと思ったのです。

その「麒麟」という雑誌を受け継いでみますと、そこにはいつでも、さっきお話したコンプラティープな大正年代と違って、そこにはビヘービラスな非常に行動的な子どもたちが描かれている。

そういう子どもたちの姿をいちばん描くことのできたのが、同じ教室の中で、子どもたちといつでも四つずもうをとるようにして子どもたちと暮っていた灰谷健次郎と



いう現場の教師でした。その教師がいつでもその「麒麟」という雑誌に「詩の黒板」という原稿を送ってくる。

先生自身は子どもたちから「黒んぼ学級」といわれるほど色が黒い。陽に焼けている。その黒んぼ学級から送られてきたものを、後に私は「先生家来になれ」という一冊の本に編集するわけです。

その本の一部を読んでみますと、中には「きょうはくじょう1ごう」という詩がある。2年生の詩です。「いけだしゅしょう、きゅーちゃん、ジェリーふじお、はしゅきお、ながしませんしゅ、けいさつかん、ピーターパン、みそらひばり、あおいたろう、さいばんかん、おおひらかんぼうちょうかん、がっこうのせんせい、おとうちゃん、おかあちゃん、みんなおしっこかけたるからそうおもえ」

で、こういうふうな詩を読んでますと、子どもたちがただ言葉を取り上げただけで、それを羅列していくだけで、子どもたちの自己主張になり詩になっていく。そこでもう一つ、この本の題名になった「せんせいけらいになれ」という詩がある。

せんせい、さるまわしのさるんって

みんなのまえでおしっこせい

せんせい、どじんになってぼくのけらいになれ

そんでつうちばみんな5にせい

そういう2年生の詩があります。

また同じような子どもたちの中で、そういう自己主張があるだけじゃなくて、実に教室の中で先生と子どもが友だちのように四つずもう組んでる中からは、こんなふうな詩が生まれてくる。思いやりのある詩です。「結婚」という詩で、これは先生が結婚する時の子どもからのメッセージです。

先生のおよめさん　きれーかおか？

やさしいか？　　ようこえとるか？

だんだんこわるで

あいてがこわなっても

せんせいはやさしせなあかんで

そしてまたネ、同じような思いやりで「ばんざい」という詩がある。

ぼく　せんせいのけっこんしきよろこんどるのやで

ばんざいいうからきいてよ

ばんざい　ばんざい　ばんざい

「おしえて」という詩がある。

せんせい　およめさんにキスをしましたか

ぼくは　せんせいがキスをしたとおもいます

せんせいおしえてくださいね

こんなふうなぐあいに、おとなと子どもの世界が解放されていると、子どもとおとなの中から、そういうすばらしい、どんな道德教育も及ばない思いやりの世界ってものが出てきて楽しい世界が生まれてくる。で、私にとって児童文学の仕事をやっているということとは、そういう仕事につらなっているわけです。

また、斎藤了一という人の『荒野の魂』というのは、私の児童文学出版の中での最初の作品です。これは滅ぼされたアイヌ民族の立場から書いています。日本にはそれまで侵略者の立場からだけ書いたものはある。それに対してアイヌ民族の立場からの小説を最初に出したのです。

それから塚原健二郎さんの『風と花の輪』という作品、これは人間が今言ったように楽しい集団というもののの中で、どんなに潑刺とするか、実に行動的な子どもたちを書いている！また山中恒さんの『とべたら本こ』という作品があります。これは、家というものの重圧から解放された子どもたちが、今日から言えば典型的なおちこぼれの子どもが、町へ出て行きいろいろな体験をしてすばらしい自立的な人間になっていく物語です。

そしてやがて、何年か、いや3年かそこいらのうちに、コノ戦後的な人間が文学の中に登場してくる。その一番典型的なのが、今江祥智さんの『山のむこうは青い海だった』、古田足日さんの『宿題ひき受け会社』、早船ちよさんの『キュウボラのある町』、いぬいとみ子さんの『北極のムーシカ　ミーシカ』、赤木由子さんの『柳の綿とぶ国』。こういうふうな、もう日本の児童文学が忘れることのできない記念碑的な作品が大き

く生まれたきたわけです。

こういうふうには作品の世界が、やがてピラミッド型に築かれると、今私たちは日本の創作児童文学がどういうものであるかということを、ふり返ることができます。「赤い鳥」の時代ということが今日ではよく言われますが、その時代のさなかでは認識できなかったでしょう。同様に、創作児童文学の時代というものも、私が夢中でやっている時代はほとんどそれを概念規定することはできなかった。

今私は現役の社長をやめて、自分は何をしたかなというぐあいで、築きあげてきた500冊、600冊のたくさんの書物というもののの中から、セクションしてみて10冊ずつ4種類、40冊の日本の児童文学という、私にとって記念すべきセットを作ってみました。

それを作ってみてしみじみ感じたことは、これはちょうど四面体のピラミッドだということです。その一面は何かというと、“面白く、何よりも面白く”ということです。口をあけて笑うことは、私たちが育った時代はまだまだお食事の時でも何でも「お行儀が悪い」と言われたもんです。

しかし子どもたちにとって一番大事なことは、一にも二にも三にも“おもしろく、何よりもおもしろい”ということです。

ついで二番目に大事なことは“ナンセンスとファンタジー”ということ。このナンセンスとファンタジーも、何やらふまじめなもののように、過去においてはみられました。赤い鳥時代にはほとんどナンセンスとファンタジーは生まれなかった。それに対して戦後、私と共に歩んでくれた作家たちの生み出した一番大きな業績は、ナンセンスとファンタジーです。

たとえば皆さんがご存じかもしれないもので挙げると、寺村輝夫という方の『ぼくは王様』というシリーズがある。この『ぼくは王様』というものが、どんなにすばらしいナンセンスの集大成であるか。

三番めには、「真実と正義」、子どもというものは、いつも真実が好きで正義が好きです。こういう作品の例はあげませんが、生き生きとした作品がいっぱい生まれてる。

そして四番めにたとえば民俗的な形象、斎藤隆介という人の『ペロ出しチョンマ』

とか、その他の作品群が、生まれていますけれども民俗的な形象。

この四つの面とは、児童文学の問題として基本的であると同時に、皆さんがこれから子どもたちに接して行く場合、あるいは児童文化の問題を考えていく場合、基本的な構築物になる。

## 11

そして皆さんが将来子どものことにたずさわる場合に、こういうふうな基本的なものを子どもに対して送るための送り方として最後にひとこと申しあげると、私にとって一番偉大な教師となったチュコフスキーという人がいます。もう数年前に亡くなられた方ですけども、「2歳から5歳まで」という、皆さんがちょうどあの勉強の対象にしていける子どもたちです。その2歳から5歳までの子どもたちのことを書いた人です。

その書物の題も『2歳から5歳まで』です。こんなタイトルがどうしてついたかというと、6歳になると、子どもたちは国家の手によって教育という体系にだきこまれてしまうわけです。それ以前の2歳から5歳までの子どもたちは、実に偉大な精神労働者であるとチュコフスキーはびっくりしているわけです。

それは何かというと、この2歳から5歳の間に、子どもたちは一つの民族の言語をその文法からニュアンスから全部自分でもって自分のものにしていくわけです。それは後に大人になってやろうとすると25年間かかってもできないだろう、と言います。どんなコンピューターでもできないだろうと。そういう大きな仕事を2歳から5歳までの子どもがやっている。

こんな2歳から5歳までの子どもたちにとって、いちばん大きな教師はだれであるかと言えば、これが母親であると。すべての母親は、一民族の代表として子どもたちの前にいるんだ、と。オシッコする時も、寝まきを着替えさせる時も、お風呂に入れる時も、ことばの森・ことばの海で子どもたちを包囲して語りかけ、語りかけ、語りかけている。

で、そういうことを通じて、子どもたちは一民族の言語というものを完全に身につけていき、その中で、ナンセンスやファンタジーとというものをしぜんに身につけてい

く。

ナンセンスやファンタジー、つまりママゴトのできる子ども、自分でないほかのものに自分を変えることのできる子ども、そういうふうな子どもたちというのは、やがて思いやりというものをいっぱい持った豊かな子どもに育っていく。そういうふうな子どもの生き生きとした生き方をしっかりとみつめることを、みなさんができるかどうか。

児童文学の世界とは、そういう子どもたちをしっかりとみつめるところから生まれてくる。チュコフスキー的な本が生まれてくる。チュコフスキーの『2歳から5歳まで』という本は、そういう子ども語録としてできあがっています。子どもたちがどんなに私たちに、教訓ぶかいことを訴えているか、語りかけているか。私たちはそれを学ぶことから出発しなければいけないでしょう。

だから皆さんは教えることばかりを勉強しないで、そういう形で子どもから教えられるという柔軟な心というものを、どのように自分の心の中にはぐくんでゆくか。これをはぐくんだ時に、皆さんはこういう大学で共に暮したということの意味をより大きく心の中に育てることができると思うのです。

私はそういう皆さんに期待すると同時に、あちこち歩いているのも、そういう若人たちに育っていただきたい、本当にいい子どもを育てることのできる人たち、いい子どもを理解することのできる人たち、そうした人たちがこの日本からどんどん どんどん消え去っていく、ものすごい時代に私たちは生きているのです。

だからこそ私たちも一所懸命に子どもたちの方へ向かなくちゃならない。私たちがどれだけ一所懸命子どものことを考えることができるかどうか、子どもといっしょに、子どもを愛することができるかどうか。そういうことが一にかかって、日本が第2の敗戦国になってしまうか、希望のある日本にすることができるかどうか、の分れめになるのです。そういうことの方が、戦争がありそんなことを言って、高い軍備のことやなんかをやるということよりは、はるかに大事なことです。

この穏やかな上小盆地のことを、最初に話しましたが、このふるさとで、本当に子どもたちにとっていい勉強をなさる、いい先輩になる、いいお母さんになる、そういうことを最後にお祈りして、私のお話を終わりたいと思います。